

# スタンダード考

埼玉大学 馬場久志

## 相変わらずの「スタンダード」

今年も教育のつどいでは、各地の教育実態が数多く報告された。そこでは毎年、学習規範や行動規範の「スタンダード」という画一管理的な規則の実態が報告される。今年もいくつもの事例を耳にした。休み時間の過ごし方、給食時の行動、教員への接し方、服装の細々としたことがらをはじめ、膨大な項目数の規則が定められている。そしてところによっては、機械的にこれまた規定化された罰則が伴う。

これらは、子どもたちにとっては、判断力の育成を妨げ、逆に管理されることの学習がなされてしまうものであり、民主社会の形成者を育てる教育からみて大

変に有害なものと言わざるを得ない。

それなのに、なぜこのような「スタンダード」が各地でまかり通るのか。単に管理志向の強い者が軍隊の閲兵のようなことを好むというだけではないだろう。あるいは、こうしないと校内が瞬時に無法状態になるというところまで、どの学校も戦場化しているわけでもない。

「スタンダード」を正当化する理屈には、社会の厳しさに習うのだとか、学習活動と学力形成の前提だということが多く語られているようである。中学校などでは高校入試に備えてと言われるところもある。生真面目な大人ほど、こうした理屈を受け入れやすい。だが当の子どもたちは、今の社会の歪みをもった厳しさや、進路に立ちほだかる現実のことくらいすでにわかつている。だから学校に妙な規定があつてよいというのは説得力を

もたない。

もちろん、子どもたちの自立をめざす多くの教員はこれとたたかっている。そうであるのに依然進行するのは、昨今の上意下達の学校体制のためでもあるが、見落としてならないのは、いわば地殻変動のように社会の価値軸が少しずつずらされているということではないだろうか。多忙を極める学校現場の生活の中で「スタンダード」を受忍することに、子どもを軸に踏ん張る気力体力の黄信号が読み取れる。「スタンダード」の内容もさることながら、これへの慣れに流されざるを得ない大人たちの価値環境の問題として、深刻なものを感じる。

## 「スタンダード」は誰のため

ところで、教育のつどいでは、学級の子どもの様子を丁寧に分析し、見通しを立てながら学習規律を設定して取り組んだある実践が報告された。報告者自身が「スタンダードとはどう違うだろう」という躊躇を交えての報告で、大事な論点の提出だったが、参加した富田充保氏が問題を明快に喝破した。それはつまり、

スタンダードは教員の立場に立つものではなく、当実践で取り組んだ規律は子どもの立場に立つもので、違いは明確であるという趣旨だと筆者は受け止めた。この峻別は「スタンダード」の本質を突くものである。実際に「スタンダード」は子どものためという装いで示されるだけに、その偽善性を疑うことは意味深い。

ただし問題はそれだけでは済まない。教員のためではよくないのかという論点は残される。どの教員も同じように指導ができることが最低限の資質だという声が上がら聞こえてくる中で、教職に就いて日の浅い教員にとって、指導技法の取得は切実な問題である。そうした中で「スタンダード」もその一つに見える。だが、教員が先輩教員の経験知に学び、そのやり方をまねてみようというのであれば積極的である。一人の教員の専門性は、目の前の子どもたちの現実をとらえ、教員集団の知恵に学びながら、困ったときの力として培われていく。しかし「スタンダード」はそういう教員の考え抜かれた学びとは同列ではない。

近年、教員の世代交代が不均等に進み、熟練者は退職し中堅層は少ないところに、多数の新任者を迎える職場になって

いる。若い教員たちは身近なモデルに恵まれないまま力量の促成が求められる。加えて重大なのは、採用時に「一人前」であることへの社会的圧力がつくられて、何か指導技法をもたないといけないという圧迫感がある。その上、学校現場には説明責任論が浸透し、これが新任教員をも脅かしている。何か、形のある技法に手を出さざるを得ない背景環境に、教員、特に若い教員が置かれているという認識をもつ必要があるだろう。だから、人は、人とのつながりを手がかりにしながら、時間をかけて成長するということが、子どもだけでなく教員も同じであることにあらためて思いをはせ、競争社会では消し去ろうとしている「ゆとり」を、子どもたちのみならず教員など大人たちにも取り戻す必要がある。

その意味で、「スタンダード」は成長する教員のためにもならない。

## 矛盾と克服

上からの教育目標は、次世代に自発的で創意のある人材を育成しなければと主張しながら、他方でかような「スタンダード」になじませるとするのは、支配に好

都合な国民の育成を脱することの出来ない為政者の抱える矛盾である。これが続く限り、格好のよい教育政策が掲げられても信用できないのだが、私たちはこの矛盾に巻き込まれたくはない。しかし私たちは知らず知らず刷り込まれている競争と管理の発想によって、怒りの感性が鈍らされているのかもしれない。

そのような中で、「スタンダード」を受忍する大人たちの弱さを叱咤激励してくれるのは、理不尽さに敏感で、不条理な理屈に弱い大人とは異なる力をもつ子どもたちの存在であろう。子どもたちが感じて見抜いているものに素直に学ぶことが、大人にとって初心に戻る手がかりになるのだと思う。

